資料・現代の詩

日本現代詩人会編

資料・現代の詩

日本現代詩人会編

講談社

資料・現代の詩

昭和五十六年六月二十日　第一刷発行

編　集　日本現代詩人会
発行者　三木章
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)　振替東京八―三九三〇
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　島田製本株式会社
定　価　六八〇〇円

落丁本・乱丁本は当社書籍製作部あてにお送りください。
送料当社負担にてお取替えいたします。

© 日本現代詩人会　一九八一年　Printed in Japan

3092-183594-2253（0）　（文1）

『資料・現代の詩』刊行にあたって

日本現代詩人会会長　大岡　信

日本現代詩人会（発足当初の十年間は「現代詩人会」と称した）が昭和二十五年（一九五〇）一月二十一日創立されて以来、三十年の歳月が経過した。

昭和五十五年（一九八〇）十月一日現在、会員数は五百十六名に達しており、会の規模はもはや昔日の比ではなくなった。規模が大きくなれば、必然的に、会が会としてどのような歴史をけみしてきたかについての認識も、人それぞれに異なって来る。すでにして三十年前発足当時のことを正確に記憶する人さえ皆無に等しい状態となってしまった。

日本現代詩人会という特定の会の歴史についてさえそのような状態であって見れば、一般に戦後の現代詩の歴史について、私たちの記憶が多くの点で薄れ、または誤ったまま伝えられて訂正がほどこされていないという事例も多いはずである。

基礎的で正確精密な現代詩資料の出版は、こういう状態に照らしても大いに必要となっていた。本書『資料・現代の詩』は、その要請に応えるべく編纂されたものである。これは日本現代詩人会三十周年記念出版であると同時に、広く日本の現代詩に関する最も広範かつ緻密な資料の集成であろうとするもので、限られた紙数の範囲内で可能な限り多くのデータを蒐集記録しえた点では、他に類書がないだろう。

三十周年記念事業の重要なテーマとして『資料・現代の詩』刊行の計画が話題にのぼったのは、決して昨今のことではない。日本現代詩人会の理事会は現在二年交代で運営されているが、昭和五十二、五十三年度の理事会（会長小野十三郎、理事長上林猷夫）でそのことはすでに話題にのぼり、刊行の可能性を検討すべく小委員会に類するものも

設けられ、具体化の方策に関する熱心な討議もなされていた。

昭和五十四、五十五年度の現理事会はこれを受継いだが、会創立三十周年の時機であるためにおのずと他にも用件がふえた中にあって、本書刊行の件は、特に重要な議題として当初から私たちの課題となっていた。ここでは、どんな本を刊行するか、ということ以前に、そもそも刊行実現の可能性ありや否や、ということがまず問題だった。懸念の一つには、資金の問題があった。日本現代詩人会の財源は決して豊かではない。乏しいと言った方が正確である。それを基礎にしての話だから、なかなかもって簡単なこととは思われなかった。

けれども、一つの会が三十年の歴史を刻んできた過程には、いうまでもなく重要な多くの出来事があったし、正確に記録して残すべき事柄は無数にあった。日本現代詩人会会則には、冒頭に次のような会設立の主旨が掲げられている。

「この会は日本の詩人の権益を団体的に守り、現代詩の普及発展のために協力し、国際的活動を推進し、詩人相互の親睦をはかることを目的とする。」

この主旨を具体的に敷衍すれば、すなわちそれが本書の内容をなすすべての事項に該当するのにほかならなかった。

昔風に言って一世代、当世風に言えば三世代はおろか、五世代にも六世代にもわたりそうにさえ思われる現代詩三十年間の急激な変遷は、もしこの機会に精力的かつ集中的に記録し集成しておかなければ、あるいはそのまま忘却の淵に沈んで二度と浮かびあがることもないであろう多くの事柄によって織り成されてきた。私たちの理事会は、そういう無数の歴史的事象に対して、記録者として一種の責任を負う立場にあることを自覚せずにはいられなかった。これが本書の実現にむかって努力した理事会の実情である。

幸いにして講談社が出版の事に当ってくれることになり、計画は急速に具体化した。例年のH氏賞に加えて、今回のこの企てのためにもまた多額の寄付を特別に寄せて下さった平沢貞二郎氏の芳情も得て、出版のための準備は順調に進み、全国各都道府県三十年間の動静に関する各地の詩人諸氏への寄稿依頼、詩人名簿作成のためのデータ、アンケートなどの事務も、ほぼ支障なく進められた。これらこまごました調査を要する仕事に対する関係諸氏の熱心なご

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

協力には、理事会として感謝のほかない。

ところで、三十年前の現代詩人会設立時から現在にいたる会の歴史は、言うまでもなく会の内部の出来事だけで尽されるものではない。会はたえず、現代詩全体の動向の中で歴史を刻んできたのである。したがって、本書の各ページには、この会に即して展望された現代詩全体の歩みが、おのずと辿られているはずである。

会の通史、各地の詩人たちの動静、詩人賞その他の記録、詩書・同人誌・詩人グループなどに関する詳細な年表、非会員をも含む詩人たち約六百名の簡明で正確な略歴ならびに代表作一篇（紙幅の都合で本文二十行以内という制約を余儀なくされたが）の掲出など、すべてを併せ見るなら、ここには過去三十年間の現代詩に関する、最も精密かつ正確な総合的案内書があると言えるだろう。

詩はどう否定しようもなくある個人独自の思想・感情の所産だが、それが多くの同時代人、また未来の人々と、多面的に深く結ばれていることもまた、否定すべくもない真実である。本書が首尾よくここに誕生することになった今、私たちをうながしてここに至らしめた根本の動機も、右のような信念にあったということを、あらためて確認する。

この緒言は、会長という立場上大岡が執筆しているが、真意においては日本現代詩人会の現理事会全体の意思を代弁しているにすぎない。本書への編集ならびに執筆協力者の中には、現在の理事会構成メンバーも何人かいる。しかもそれぞれが、特に多くの労力と細心の調査・編集作業を必要とする項目を担当している。ここでは、本書の成立ち方からして、それらの人々の名をいちいちあげることはしないし、また前任理事会当時努力してくれた関係諸氏の名をあげることもしないが、私は毎月の会合で、本書編集の直接の当事者諸氏がいかに苦心を重ねてきたかを見知っているだけに、一言ご苦労さまでしたと申しのべることだけは許してもらいたいと考える。

『資料・現代の詩』が、現代詩の歴史を記録した信頼すべき書物として、将来広く活用されることを私たちは心から願っている。（一九八一年五月）

目次

『資料・現代の詩』刊行にあたって　大岡　信 1

日本現代詩人会三十年史　上林　猷夫

敗戦と文学界の動き 11　現代詩人会の創立 15　H氏賞の創設 23　権益の擁護と声明書 26　国際交流 34　会編集の刊行物 40　H氏賞事件とその後の運営 48　講演会・研究会・作品放送 59　H氏賞授賞式・現代詩講演会・詩祭 65　追記 77

各地方の活動状況

北海道・千葉宣一 83　青森県・内海康也 85　岩手県・大坪孝二 86　宮城県・藤一也 87　秋田県・芳賀秀次郎 88　山形県・芳賀秀次郎 89　福島県・三谷晃一 90　栃木県・高内壮介 91　群馬県・梁瀬和男 92　茨城県・星野徹 93　埼玉県・秋谷豊 94　千葉県・荒川法勝 95　神奈川県・筧槇二 96　静岡県・高橋喜久晴 98　山梨県・杉田巌 99　長野県・殿内芳樹 100　愛知県・御沢昌弘 101　岐阜県・平光善久 102　新潟県・戸田正敏 103　富山県・松沢徹 104　石川県・安宅夏夫 105　福井県・南信雄 106　三重県・津坂治男 107　滋賀県・大野新 108　京都府・角田清文 109　大阪府・井上俊夫 111　奈良県・右原蹇 113　和歌山県・山田博 114　兵庫県・足立巻一 115　岡山県・秋山基夫 116　広島県・相良平八郎 117　山口県・杉本春生 118　鳥取県・岡崎澄衛 119

島根県・岡崎澄衛 120　香川県・じっこくおさむ 121　徳島県・扶川茂 122　愛媛県・香川紘子 123　高知県・片岡文雄 124　福岡県・黒田達也 125　大分県・滝口武士 127　佐賀県・山内良男 128　長崎県・風木雲太郎 129　熊本県・犬童進一 130　宮崎県・金丸桝一 131　鹿児島県・杢田瑛二 132　沖縄県・岸本マチ子 133

記録・資料　石原　武

詩人賞 137　日本現代詩人会から敬意をおくった先達詩人 158　戦後の主な詩人全集 159　戦後の主な詩全集、アンソロジー 161　詩人団体一覧 165　物故会員名 167　日本現代詩人会会則 167

戦後詩史年表　小海永二・深澤忠孝 176

現代詩人名簿 327

あとがき　小海永二 522

資料・現代の詩

編集委員

磯村英樹

小海永二

郷原　宏

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

日本現代詩人会三十年史

上林　猷夫

敗戦と文学界の動き

昭和十二年七月七日、北京西南郊外蘆溝橋では日中両軍が衝突し、世に言う蘆溝橋事件が起った。つづいて第二次上海事変が起り、日中関係はますます険悪となり、ついに全面的な日中戦争に拡大して行った。昭和十四年五月、ソ満国境でノモンハン事件が起き、同月独伊軍事同盟成立、七月には日米通商協定廃棄通告となり、昭和十五年九月、日独伊三国同盟の成立によって、急速に日米関係は最悪の状態に進展して行った。昭和十六年六月独ソ開戦、七月日本軍の南部仏印進駐により、米英の日本在外資産の凍結となり、東条英機軍部内閣の出現によって、十二月八日対米英開戦が布告され、八日ハワイ真珠湾奇襲攻撃にはじまる太平洋戦争に突入した。かくして第二次世界大戦の悲惨な闘争は、果てしなく地球上広範囲に繰りひろげられ、またしても人類の恐ろしい魔性を現出した。米英連合軍の猛攻撃により、昭和十八年九月イタリアの無条件降伏、ついで昭和二十年五月のドイツ軍無条件降伏となり、緒戦における戦果に惑わされた日本国民は、長期戦の疲弊の苦しみに喘いだ。米国の巨大な戦力による日本各地の空襲、世界最初の原子爆弾が昭和二十年八月六日広島、八月九日長崎に投下され、その被害の非道無惨さは到底筆舌に尽し得るものではなく、眼を蔽うばかりであった。この時(八月八日)、ソ連軍が対日宣戦布告を行ない、北満、朝鮮、樺太に進攻を開始するに及んで、ついに日本はポツダム宣言を受諾し、八月十五日天皇の「終戦の大詔」を録音放送し、無条件降伏した。かくて昭和六年九月の満州事変勃発から数えて十五年、太平洋戦争開始から三年八ヵ月にわたった夢魔のような戦争の時代は、約四百万人に及ぶ犠牲者を出してようやく終息したのである。二十代、三十代の詩人は兵士として召集され、中には腕や脚を失うもの、戦死して行方の知れないもの、ソ連領に長期抑留されるものなど、悲痛な戦争体験を味わった。また、高見順、山本和夫、大木惇夫、中島健蔵、井伏鱒二、神保光太郎、田中克己、北川冬彦ほか、四十代以上の詩人、作家たちは、昭和十六年十一月頃から陸海軍報道班員として徴用

され、南方へ派遣された。そして草野心平は中国嶺南大学時代の同期生林柏生の要請で、南京政府宣伝部顧問となって中国に渡り、小野十三郎は徴用で大阪藤永田造船所の労務部へ配属され、金子光晴は一人息子の徴兵忌避を図り山中湖村に、丸山薫は東京空襲で自宅を焼失し、山形の辺境岩根沢に、同じくアトリエを炎上した高村光太郎は花巻に疎開していた。

敗戦宣言の八月十五日は、空は晴れ渡り蒸し暑い日であったが、国土は大部分破壊され、戦禍によって食うに米なく、飢えと混乱の中で、国民は一度に虚脱状態となり、初めて敗戦の悲惨さを身に沁みて体験することになった。八月三十日午後二時五分ダグラス四発機が単機神奈川県厚木飛行場に飛来した。扉が開いて梯子がおろされ、機内から六尺豊かなダグラス・マッカーサー連合国総司令官が、開襟シャツに半ズボン、黒眼鏡をかけ、胸に勲章一つもつけずに、右手で大きいコーン・パイプをくわえ、実に気軽ないでたちで、儀礼もなく降りてきてゆっくり歩を進めた。戦勝国総司令官のこの無造作な姿を呆気に取られながら見ていた人々は、これをアメリカ民主主義の象徴として感じたのである。マッカーサー総司令官は、取巻くカメラマンにポーズを取ってから、「日本の誠意で戦争終結は完全且つ見事に予定通り進行している。」と云った。九月二日横浜沖に停泊した第三艦隊旗艦ミズリー号で、日本の降伏文書調印が行われ、昭和二十六年九月八日サンフランシスコ講和条約が結ばれるまで、正式に連合国の占領下に入った。これより現代詩も各人それぞれの複雑な戦争体験によって、長い長い戦後の時代に入ったのである。

九月八日、連合国軍（実質はアメリカ軍）マッカーサー総司令官は、戦車を先頭に、装甲車、ジープを連ね、第一騎兵師団の将兵八千人を従え、東京に正式に進駐してきた。そして、宮城の濠をへだてた当時の麹町区有楽町一丁目にある第一相互ビルの連合軍総司令部（General Head Quarter）に入った。その日は明るい初秋の日射しだったが、あたりに通行人はなく静まり返っていた。銀座通りの焼け落ちたビルの中から、通り過ぎる戦勝国の圧倒的な行進を見た人々は、東京大空襲で焼死した肉親や、還って来ない友人の顔を思い浮かべていた。東京は三月十日未明の大空襲で、少なくとも十万人以上の市民が死亡し、十一万人以上が傷を負ったと伝えられている。深川、本所方面の掘割りは人で埋まり、道路は焼け焦げた屍体で歩けないほどだった。鉄板の上で屍体を焼

く煙が立ちこめ、この世の地獄絵であった。ぼつぼつバラック建ての家が出来、銀座の焼け跡に露店が出現し、闇市が有楽町、新橋、神田、池袋、新宿、渋谷駅前の空地にひしめき、そこではパン、砂糖、牛肉、菓子、タバコ、ふかしいも、フライパンなど、あらゆるものが堂々と戸板の上で売買され、ゲートルを巻いた復員姿の人々で終日賑わっていた。銀座の目抜きの通りで焼け残った松屋デパートや、銀座四丁目の服部時計店は、進駐軍のPX（酒保、軍人専用の物品販売、慰安提供）に接収され、表では外国タバコやチューインガムをねだる戦災孤児であふれていた。また、銀座七丁目の幸楽（現東芝ショールーム）は、特殊慰安施設協会という公娼提供機関として進駐軍向けの慰安婦を募った。衣食保証のため、一時彼女らは七万人もおり、これが一般の「良家の子女」の防禦になったと云われているが、焼け跡には、「リンゴの唄」が流れ、いわゆるパンパンガールが外国の兵隊と手をつないで歩いていた。これが敗戦国の実相であり、国民への残酷な報酬であった。

*

昭和十六年十二月八日の太平洋戦争突入により、昭和十七年五月軍部の圧力で内閣情報局直属の「日本文学報国会」が設立され、文芸家協会も統合された。文学報国会の詩部会役員は高村光太郎、西条八十であり、「辻詩集」の刊行や「艦奉れ」など、国策の実践に協力し、国威宣揚的な朗読会、講演会を開催した。敗戦となるや、これらの協力活動において、「文学者の戦争責任」問題に発展してゆくのである。高村光太郎の『暗愚小伝』における自己流謫の言葉は、文学者の態度表明として大きく注目された。舟橋聖一は文芸家協会の再建を考え、友人の河上徹太郎、中島健蔵、佐多稲子、そして菊池寛とも相談し、発起人会を開き、昭和二十年十二月四日創立総会を開催し、内幸町大阪ビルの文芸春秋社内に、菊池寛を会長として日本文芸家協会が創立された。日本文芸家協会とほとんど同時に、戦前の「日本プロレタリア作家同盟」（ナルプ）所属の民主主義文学の前進を標榜して弾圧された文学者を結集し、十二月三十日「新日本文学会」が創立された。これには中野重治、壺井繁治、金子光晴が中央委員に推薦された。日本ペンクラブも、昭和二十二年二月に再建された。

戦時中は、瀧口修造や、「神戸詩人グループ」のごとく、シュールレアリストとして反戦活動の疑いで検挙された詩人の消息も分り、用紙配給制度によって統合、廃

刊に追いつめられていた詩雑誌も、GHQの検閲制度の下にぽつぽつ出はじめた。昭和二十年に「鵬（FOU）」（九州）、昭和二十一年三月までに「近代詩苑」（東京）、「詩風土」（京都）、「新詩人」（長野）、「国鉄詩人」（東京）、「新詩派」（東京）、「純粋詩」（東京）などが、いち早く刊行された。同年四月、金子光晴、岡本潤、小野十三郎、秋山清らによって創刊された「コスモス」の、「敗戦の今日ではまた風の吹き廻しで猫も杓子も民主主義を唱え昨日まで反動的国家主義の笛を吹いていた者までが恬然として自由の歌手に早変りするというさわぎです。（省略）」という巻頭の言葉は、当時の一般風潮を云い表わしている。つづいて「花」（大船）、「ゆうとぴあ」（東京）、「VOU」（第二次、東京）が、昭和二十二年には、「鱒」（東京）、「IOM」（姫路）、「母音」（久留米）、「女神」（新潟）、「日本未来派」（鎌倉）、「歴程」（東京、復刊）、「至上律」（札幌）、「蘇鉄」（高知）、「詩学」（ゆうとぴあ改題、東京）、「荒地」（東京）、「詩作」（岡山）、昭和二十三年には、「現代詩」（改組、新潟）、「山河」（大阪）、「詩文化」（大阪）などが発刊され、他に「マチネ・ポエティク」グループによって定型押韻詩集が出版された。またこの年、全国的な規模のアンソロジー『現代日本代表作詩集』（海口書房）が仙花紙で刊行された。

昭和二十四年には、「PAN POESIE」（東京）、「零度」（東京）、「新日本詩人」（東京）などが創刊され、十月に占領軍の検閲が廃止となり、続々と詩雑誌の刊行をみた。即ち、「地球」（第三次、浦和）、「時間」（第二次、東京）、「詩世紀」、「現代詩研究」（東京）、「MENU」（神戸）、「詩行動」（東京）などで、「芸術前衛」と「造型文学」の有志による「列島」（東京）や、「GALA」（東京）、「ポエトロア」（東京）などが創刊されるのは、昭和二十七年のことになる。何れも多数の同人を擁し、新しい詩現実の創造を目指した活動は、戦後社会における複雑性を表わしていた。

詩集も昭和二十一年から昭和二十四年までの間に、小野十三郎『大海辺』、壺井繁治『果実』、岡本潤『襤褸の旗』、小熊秀雄『流民詩集』、高村光太郎『暗愚小伝』（雑誌「展望」）、西脇順三郎『旅人かへらず』、真壁仁『青猪の歌』、金子光晴『落下傘』『蛾』『鬼の児の唄』、浅井十三郎『火刑台の眼』などが、困難な印刷事情の中で刊行され、戦後詩の出発に重要な問題を投げかけた。

同時に、小説では高見順『わが胸の底のここには』、野間宏『暗い絵』、織田作之助『土曜夫人』、梅崎春生

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com